

都の新更科はここです！



平安神宮の巨大鳥居と東山（京都国立近代美術館から、シリーズ 185 号参照）



高台寺の月見台と東山（シリーズ 40 号参照）



清水寺入り口の仁王門、背景に東山



京都の「新更科」という地名についてこれまでシリーズ49号などで現在の東山区月見町一帯の呼び名だったと紹介してきましたが、ここに全体像を紹介できるようにしました。大きなきっかけは、老舗和菓子「虎屋」研究主幹の今村規子さんに教えていただいた平凡社の「日本地名体系」の記述です（下に全文、虎屋では「新更科」という季節限定のようかんもあります。180号もご覧ください）。

「月見町」の項によると、新更科の呼び名は江戸時代半ば、都の東に連なる東山から上る月が東山のさらに向こうの名月で名高い「信州更科」の景色を思い起こさせることから生まれました。当時は樹木が茂り、

悪縁切り・良縁結びの神社としても知られる安井金毘羅宮の境内から見た東山。中央奥に法観寺の八坂の塔



●月見町 京都市東山区東大路通松原上ル4丁目 広道通（安井門前通、現東大路通）に位置。この街路はもと蛇の辻子、また苦集滅路ともいった。現在の位置は、東に道を隔てて、南は上弁天町・毘沙門町、西が祇園町南側、北が清井町だが、江戸時代は蛇の辻子に沿って、八軒町（現在祇園町南側に合併）の南に位置する町であった。

宝暦12年（一七六二）刊「京町鑑」は「此南の町（上八軒町）月見町」とし、「此南、西側に安井御門跡也。御門正面通東へ行、下川原へ出る」とみえる。「京都府地誌」は「元、建仁寺、知恩院領ノ地、宝暦四年四月、安井旧蓮華光院。開拓シテ、堂宇ヲ建設シ処。東北ニ当テ、月見松ト名クル一老木アリ。依テ町名ニ下スト云。此ヨリ、北方祇園ノ間、正徳中開市ノ地タリ」と述べる。「京町鑑」は、「此辺、月見によき場所なるゆへ、世人、新更科と称す。然るに洛外繁栄によつて、段々人家建つづき、宝暦年中にいたつて益々建並び、故に月見町と小名によぶ」とする。これによれば、正式に町家地に編入される以前より、人家が増えていったことがうかがえる。地図では天明6年（一七八六）京都洛中洛外絵図にみえるのが早い。「京町鑑」にいう「新更科」の呼称は、月見町のみならず鷺尾町・下河原町・上弁天町・清井町など、祇園南林及びその周辺一帯の雅称であった。安永9年（一七八〇）の「都名所図会」、寛政5年（一七九三）「都花月名所」などにみえ、文政2年（一八一九）「扁額軌範」は次のように記す。

祇園社より南の方は、両辺林にて、蒼樹覆鬱として、月の夜は東山の端を露る景色。信州更科の景色に髣髴とて、新更科と称し、名月の夜は安井（金毘羅宮）門前より祇園の南、下河原の地に床机を置ならべ、騒客墨客、此地に聚り、夜更るまで月を賞しけるが、寺々に林の木を伐、追々地を開いて人家建続き、月を観るに地なく、終に新更科の名失たり。